

杉本 匡史(伊勢赤十字病院 循環器科)

【経過報告書】

【留学先】IRCCS Policlinico San Donato, Cardiology, University of Milano, Milano, Italy

【テーマ】安静時および運動時の右室-肺循環連関に心肺運動トレーニングが及ぼす影響

イタリアのミラノに 2 年間の予定で留学をしております杉本匡史です。留学後 3 ヶ月が経過し徐々にミラノの環境にも順応してきました。留学先の IRCCS Policlinico San Donato はミラノ市の南東に位置するミラノ大学の附属病院であり、私は Marco Guazzi 先生のもとで心肺運動負荷試験と負荷心エコー検査を同時に行う臨床研究をしています。毎日のルーチンとして心肺運動負荷試験、安静時心エコー検査、呼吸機能検査および心肺運動負荷と負荷心エコーの同時検査を行っています。心臓血管外科が盛んな病院でもあるため対象患者さんも多岐にわたり、先天性心疾患の修復術後、成人先天性心疾患、から高齢者の弁膜疾患および虚血性心疾患にいたるまで幅広い疾患を経験することができます。留学中の研究テーマは左心系心疾患が右心-肺循環のアンカッピングを引き起こす病態の解明であり、呼吸・循環の病態生理を基本とした臨床研究を行っていく予定です。貴重な海外留学での経験を活かして留学助成を頂きました心エコー図学会の発展に貢献できるよう、日々研鑽を積む所存です。

【帰国報告書】 イタリアからベルギーへ

【留学先】Department of Cardiology, University of Liege, Liege, Belgium

【テーマ】安静時および運動時の左房機能が右室-肺循環関連および心肺運動機能に及ぼす影響

2015 年 3 月からイタリアのミラノにある I.R.C.C.S. Policlinico San Donato 病院に臨床研究目的で留学いたしました。ミラノ大学の心不全部門で教授をされている Marco Guazzi 先生の下、心肺運動負荷試験と運動負荷心エコーを同時に行うことで酸素動態と血行動態を総合的に、かつ非侵襲的に評価する研究に参加することが出来ました。当初は 2 年間の留学予定でしたが、制度の改変(改悪?)に伴い研究ビザの取得が極端に困難となり、私だけでなく他大学の基礎研究者・臨床研究者もイタリアでの研究ビザが取得できない状態となってしまいました。八方手を尽くしましたが、最終的に長期留学に必要なビザの取得は困難との結論に至り、Guazzi 先生からベルギーのリージュ大学を紹介していただき、聖マリアンナ医科大学の黄先生のご協力もあり、留学先を移転することが出来ました。ミラノの平日業務は、安静時心エコー、心肺運動負荷試験、心肺運動負荷試験&運動負荷心エコーの 3 つを曜日ごとに決められたスケジュールでこなしていき、その日の午後もしくは週末にレポートを作成する流れになっていました。ミラノもリージュも午前中に多くの検査を入れる習慣があり、13 時過ぎまで検査が続くためランチを食べ終わるのは 14 時前という生活パターンでした。

2016 年 2 月からはベルギーのリージュ大学病院に臨床研究目的で留学いたしました。リージュではドブタミン負荷心エコーを世に広めた Luc Piérard 主任教授と運動負荷心エコーを世に広めた Patrizio Lancellotti 教授の元で虚血性心疾患や心臓弁膜症を中心に負荷心エコー検査を日々行い、研究を行っていました。リージュは第二次世界大戦後にナポリからの移民を多く受け入れた歴史があり、Lancellotti 教授も幼少期にナポリからリージュに移った移民の一人です。エコー室で働く主任看護師もナポリ出身であり、イタリアからのフェローも多いためエコー室はフランス語(ベルギー南部: Wallon 地方の公用語)、

イタリア語、英語が入り乱れています。ルーマニア出身で負荷心エコー室の主任をしている Dulgheru も母国語のルーマニア語に加えてフランス語で日常臨床を行い、英語でフェローへの説明や学会発表を行っており、3 か国語以上を話せるスタッフが当然のように働いています。フランス、イタリア、ルーマニアはともにロマンス諸語(いわゆるラテン系言語)であるため言語の習得が比較的容易であり、英語も公用語として身につけているため 3 か国語以上を話せるのだそうです。ベルギーは EU や NATO の本部があることから分かるようにヨーロッパ内の様々な文化が入り乱れる潮目に位置しており、国籍・言語・人種が異なっている人々がいかに生活を共にするかに常に注意が注がれている印象です。

研究活動としてはミラノで行った心不全患者における運動負荷中の左房機能に関する研究が JACC Cardiovascular Imaging に受理され、現在もミラノへ短期往復しながら研究を継続しています。またリエージュでは健常者を対象とした大規模多施設研究(NORRE 研究)の一環として行った安静時左心室 2D ストレインおよび安静時左心房機能に関する 2 研究が、いずれも Eur Heart J Cardiovasc Imaging に受理されました。ヨーロッパ旅行も留學生活の醍醐味で、2016 年はマーストリヒト(オランダ)、ハンブルグ(ドイツ)、バルセロナ(スペイン)、ブルージュ(ベルギー)、マルタ、デュルビュイ(ベルギー)、アーヘン(ドイツ)、ロンドン、パリ、プラハ(チェコ)を家族で訪れることが出来ました。さらに学会・研究会でイタリア(ミラノ、フィレンツェ、ローマ)とアメリカ(シカゴ、ニューオリンズ)にも訪れることができ、これまでの人生で最も旅行した年となりました。なにより日々の生活の中で家族の健康やヨーロッパ在住の日本人コミュニティーの助けがいかに大事かを実感することができ、自分の財産とすることができました。最後に改めて、海外留学助成を頂きました日本心エコー学会の皆様に感謝申し上げます。